



The Red Stars

●編集・発行:蜂起社/東京都江東区大島3-9-25 ●本号200円(隔月発行)年間購読料:1部2000円(送料込)

未来を拓く左翼再生の構想 連帯の新しい砦を!

試練に立つ左翼

新たな左翼再生への構想と課題

原 隆

〈前号から続く〉

Ⅲ 左翼再生への新しい道

世界情勢は大きくうねり、今や「嵐のような時代」の到来を告げている。歴史がドラスチックに転換する革命の予兆に満ちた「過渡期の世界」に私たちは、生きているのである。構造的暴力を露わにしたグローバル資本は、「人間らしく生きられない」ほど格差・不平等に苦しむ持たざる者—プロレタリアの怒りの火にますます油を注いでいる。一方で政治や社会状況が大きな地殻変動に見舞われる中、台頭するナショナリズム(国家主義)を抑制する理念や民主主義、既成の制度的議会政治は劣化するばかりだ。未来への変革の構想(ビジョン)を示し希望を取り戻すための左翼のイニシアティブが存在しないからだ。

ところが今日、旧態依然とした左翼に逆風が吹く中で、直接行動を通して草の根から民主主義を戦い取ろうとするうねりが世界中で広がっている。それは資本主義体制を揺るがす反乱の予兆であり、新たな革命の序曲(プレリュード)に他ならない。

2011年以降、欧州の「怒れる者(インディグナドス)」や米国の「オキュパイ・ウォールストリート」、台湾のひまわり運動、香港の雨傘運動、日本の反原発や反安保法運動、韓国(16年)のキャンドル運動に象徴されるこうした草の根から民主主義を戦い取ろうとする一連の大きなうねりは、世界的な「新たな変革の胎動」として注目に値する潜在力を宿している。

ところが旧来型左翼は、このような新たな「変革の予兆」に狼狽し冷笑したり過小評価してネガティブに反応(警戒)する傾向にある。なぜか。それは世界を席卷し

た一連の「新しいタイプの社会運動」(A・ネグリ)が、旧来のステレオタイプ(紋切り型、形式主義)の思考—行動様式や先入観(バイアス)に囚われた左翼の理論的・政治的パラダイムに根本的な見直しを迫ると同時に旧来型左翼の存在意義を弱めてしまったからだ。本来は国際的視野から情勢を捉え変革のイニシアティブを創造する役割を担わなければならない左翼が、「時代が変わった」と認識せざるをえないような時代のトレンド(傾向)に目をつぶったまま、センサーが鈍くなってフォーカスがずれているためだ。草の根から既存の政治に地殻変動を起こしている「新しい政治のうねり」を感じ取れず、すっかり退化し世界の動きから大きく立ち遅れてしまっていることの証しとも言える。内外の政治情勢に地殻変動が起きる「過渡期」は、私たち左翼にとって危機(ピンチ)にも、好機(チャンス)にもなりうる。1989—91年、東欧—ソ連の旧体制崩壊によって「社会主義」が信頼を大きく失墜させた危機と比するほど、左翼は今、かつてない存亡の岐路にあり、再生途上の試練に立たされているのである。私たちは、いよいよ左翼を再生する本気度が試される局面を迎えたのである。

〈1〉

情勢認識と戦略のパラダイムシフト

拡大する格差・不平等によって「人間らしく生きられない」現実—深刻の度を増す「生きづらさ」が、怒りに燃えたプロレタリアを、草の根から民主主義を取り戻すための闘いに駆り立てている。

資本主義グローバリズムは今、新たな変革のうねりに見舞われ、情勢は確実に「嵐の時代」を迎えているのである。資本主義体制を揺るがすプロレタリアの草の根の抵抗・反乱を「結合し普遍化する」(マルクス)ためのイニシアティブがますます求められている。

左翼は、現状の情勢を的確に分析・洞察することによって一情勢をどう捉え、いかに闘うか—世界を変えるためのラディカルなイニシアティブを提示する責任がある。時代や情勢が変われば、それに対応すべき運動—組織論や戦略、活動の方法・形態も当然見直しと再創造を迫られる。時代錯誤の情勢認識では、闘い方を間違えミスリードする。かつて有効であった戦略も、時代の変化に対応していなければ桎梏と化す。思想や理念がいくら正しくとも、戦略が間違っていれば、現実を変えられない。

ところが、変化する情勢に、左翼が「受け身」のままでも(あるいは個別スローガン羅列するだけでも)、存続しえた時代は過去のものになりつつある。様々な社会運動の様式も大きく変わっている。旧来型左翼を長年支えてきた1世紀も前の時代遅れでステレオタイプのテーゼ—マルクスの窮乏化革命テーゼ、レーニンの戦争を内乱へのテーゼ—の有効期限もとっくに切れている。だが時代の変化に目を背けている左翼は、「戦争を内乱へ」テーゼを現代にアナロジーするドグマ(レーニン教条主義)から脱却できないのだ。これはレーニンの責任なのか。違うだろう。

ロシア革命から100年を迎える今、ボルシェヴィキを「成功モデル」として前例踏襲し自らを強引に投影、アナロジーすることは、あまりにも時代錯誤と言わざるを得ない。「戦争を内乱へ」のレー

ニンのテーゼ・戦略が歴史的な有効性を持ちえた第1次—第2次世界大戦のような帝国主義国家間の総力戦争時代と同じ客観的歴史的条件は、21世紀の現代には存在しない。多国籍企業が展開するグローバル리즘の下で世界各国の相互依存的経済関係は、かつてないほど強まっている。それは少なくとも主要先進国—帝国主義の経済のトレンドである。現代の戦争の主要な性格も対テロ戦争を名目にした侵略戦争へと変容している。この21世紀の「現実」を度外視した、植民地の争奪・再分割戦→経済のブロック化→帝国主義総力戦争の不可避性という1世紀前の古典的情勢認識のシェーマ(図式)は、既に歴史的・客観的な根拠を失っているのである。

「帝国主義戦争の不可避性」をテーゼ化した「戦争の危機」論は「資本主義の全般的危機」を強調したスターリン主義的な情勢分析の枕言葉である。依然として旧来型左翼や教条的マルクス主義の中で多用されている戦略概念だ。もともとは、プハーリンのコミンテルン綱領草案(1924年)を起源として、世界戦争による危機から世界革命を直線的・攻勢論的に展望していた。革命主体(プロレタリア)の成熟度にかかわらず、それを度外視して恐慌や戦争の発生によって資本主義の危機を「断末魔」や「世紀末的破局(カタストロフィー)」といったイメージで捉えた経済決定論と言えよう。「革命的危機」の存在を自明のものとして、ただちに「革命的危機」が到来するかのよう思い込み・誤謬を蔓延させ破産した。現実から目を背け戦争危機の革命論に固執する教条主義(現実よりも教条を優先する思想)から脱却できなければ新たな情勢に対応して戦略を柔軟に見直すイニシアティブが失われるという教訓がここにある。

レーニンの「危機」概念は、それとはまったく違う。周知のようにレーニンは、①下層—搾取・抑圧され困窮した大衆が、いままで通りに生活できず、それを自覚し変革を希求していること。②上層—支配層が、いままで通りに支配

統治することができなくなること。この2点を要件とした情勢認識であった。それは、あくまでも革命主体(プロレタリア)の成熟度を分析・洞察した革命論なのである。

既に破産を宣告されたスターリンとプハーリンの恣意的な「資本主義の全般的危機」論、カウツキーの「資本主義の破局の到来」を前提とした経済決定論的な戦略論とは、レーニンの情勢認識論は大きく異なっているのだ。この相違点を理解せず、「依然としてスターリン主義的パラダイムに帰属している」(ラクラウ、ムフ)ステレオタイプで教条的な旧来型左翼の思想的・理論的な退化は今日、深刻である。1世紀前のテーゼを現代にアナロジーする愚を犯しているため思想的信用をさらに貶めているという印象は拭えない。それが左翼衰退の流れを止められない理由の一つであり、「新しい左翼の思想形成」(前同)が求められている所以である。情勢の変化を捉え、それに対応するには、闘い方、戦略の再創造が不可欠だ。センスのない発想や旧態依然の考え方を刷新できない層におもねってパラダイムシフトを先送りするほど、左翼は再生の展望を自ら閉ざしていくことになる。

〈2〉

21世紀の革命の構想とイニシアティブ

新自由主義・グローバリズムが世界を覆う中、貧富の格差の拡大は、社会を「二極化」「不安定」にし、不公正・不平等を野放しにしている。その「歪さ」は、一方でそれを逆手にとった反動であるナショナリズム(国家主義)を台頭させている。他方で世界中で格差・不平等に苦しむ持たざる者の怒りの火に油を注ぎ、草の根民主主義のうねりを呼び起こしている。世界は今や、グラスルーツ・デモクラシーか、ナショナリズムか、という分岐点にある。これが私たちは今、どういう時代に生きているのか。そしていかに闘うべきか、という情勢認識の基調である。(2面に続く)

一握りのごくごく少数の持てる者(富裕層)が暴利を貪り政治的・経済的な恩恵を享受する一方、その対極にある圧倒的多数の持たざる者は、不安定な雇用や生活によってかなりの苦しみを強いられている。それにもかかわらず、既成政治から疎外され社会的権利を奪かされて弱い立場に追い込まれている。新自由主義は、「社会保障は、働きたくない怠け者を増やし得をさせるだけ」というまやかしの先入観・デマゴギーを人々に刷り込むことで、「社会保障の解体」を正当化し、社会的排除と同義の「自己責任」の観念を醸成しているのだ。別な言い方をすれば、新自由主義は、競争と分断による格差の拡大と、恵まれない人々への社会保障に対する敵意が、その思想と政策の支柱となっているということだ。

こうして格差社会は、人々を弱肉強食の殺伐とした競争に追い込み、バラバラに分断している。制度的政治と既成政党は、この不正・不平等で歪な社会構造と政治体制を黙認・擁護することで政治不信を増大させてきた。それゆえ既成政治に対する不信と怒りを募らせた持たざる者は、社会的な公正・平等と連帯を求めて、格差社会への抗議(反格差の社会運動)や、①草の根の連帯に基づいた、②自律的な直接行動によって、③(直接)民主主義を実践する傾向を強めている。それはもはや世界に共通した新しい政治の潮流となりつつあり、旧来型左翼に強く自己改革を迫っているのである。

物事を考えたり判断する手がかかりとなる「物差し」も、古臭くなって指標にならなくなれば、見えるべきものを見えなくする。先入観や固定概念に囚われると桎梏にさえる。マルクスやレーニンの言葉を金科玉条のごとくかざしたり、それに平伏するような権威主義的な発想は、マルクス主義とは無縁である。この1世紀の間、マルクスとレーニンの思想や著作の理解の仕方が、取扱説明書もないため、スターリン主義による歪曲を典型として、決して均等になされてきたわけではない。私たちは、むしろ従来のマルクス主義の通説やステレオタイプ化した経済決定論、階級還元論等の伝統的な概念に異を唱えてきた。私たちが重視するのは、後知恵的な視点から細部の矛盾や過不足をあげつらうことではない。マルクスやレーニンが時代の制約の中で苦闘しながら描いた革命の構想や理念から、広い視野でイマジネーションを働かせて現代に生きる私たちが示唆を得、21世紀の革命の理念を再創造することにある。

革命の理念と現実の政治が一体化せず乖離することは歴史上よく見られた。フランス革命のジャコバン派の恐怖(テロ)政治を例にとるまでもないが、権力を握った勢力が「理念モード」から「統治モード」に転換して、異論を圧殺することもあった。スターリン主義の共産党一党独裁は、この例を踏襲したものと言える。だが現実の変革は、常に理想の追求からしか生まれえない。理想を追求(ある

いは変節)した政治の結果(成否)として現実があるのではないのか。革命の物差しである理論や戦略が時代の変化に対応したものでなければ、新たに理論を創造する他ない。そのための議論を怠っていれば(日本は欧米に比べて周回遅れた)、それは思考停止・展望喪失に陥っている証左だ。だが結局のところ、どんな立派な理論や制度も(例えば民主主義的中央集権制等の組織論なども)、それを運用し担う者の人間性や公正性、思想性次第で功罪は決まる。それを悪用しようとする者の手にかかると、人を痛めつける手段にもなれば、逆にどんなに出来の悪いシステムでも、それを人のために役立てようとする者の手に委ねられれば、正す方向に向かう。

E・H・カーは『ロシア革命の考察』(みすず書房)で、「レーニンは、『我々の運動には』そういう種類の夢があまりにも少なすぎ、そして、自分たちのしらふなことや『具体的な事から』に『近い』ことを鼻にかける人々があまりにも多いことを嘆いたのであった」と述べている。未来を見通すことは誰にもできない。だがマルクスやレーニンは、世界の動向や現状を冷徹に洞察し、常に半歩先を見据えて新たな針路を切り拓くために未完や未踏への挑戦を訴えてきた。その理念が人々を突き動かす、多くの挫折や犠牲を伴いながらも、革命への試練に立ち向かわせてきたのである。現実を言い訳にしてどんな社会を目指すのかという理念の羅針盤を失ってはなるまい。「思想」には、人の生き方を左右する力がある。言語や様々な表現行為を通じて、人間と人間を繋いだり、人間同士の関係や連帯、社会の在り方を提示してきた。マルクス主義の思想水脈は、世代や国境を越えて今も深部で繋がっている。プロレタリアの国境を越えた連帯を支えるこの思想が、再び必要とされる「嵐の時代」は確実に到来している。

〈3〉 試される反資本主義左翼の再生への展望

「左翼の再生」を困難にしている問題点は何か。それは左翼自身に内在した問題に起因している。第①に過去の過ちや失敗に頼り頼りして歴史から教訓を学ぶ姿勢に欠けていること。第②に時代のうねりやトレンド(傾向)に目を背けているため現在の情勢から「立ち遅れている」ことを認められず、世界の動向や変革の予兆を捉えることが出来ない。つまり情勢認識と基本戦略を間違えていること。したがって第③に左翼の再生の妨げになってきた旧弊の刷新(パラダイムシフト)にネガティブで、未来の革命の構想(ビジョン)と展望を失っていることである。こうした左翼の「過去・現在・未来」が、退潮に拍車を掛けている主な理由と言える。

なぜ日本の左翼は、かつてない岐路に立たされているのに、危機感もなく、「このままでいいのか」という問いにも応答しようとしれないのか。再生のためには自ら

変わらなければならない、変わる必要がある、という問題意識をどうして欠いているのか。それは、自分たちが実際に人々の目にどう映っているのか、少なからぬ人々から不信感を持たれているという「不都合な事実」に目をつぶっているからだ。また時代の変化に疎く世界の新たな潮流から「立ち遅れている」現状を、国際的視野と大局的見地から相対化することを拒んでいる。「あれもやった、これもやっている」と虚栄や自己顕示が目立ち自己充足的でタコソボ化した旧来型左翼には、自らを変えねばならないという意識は乏しい。

また腐れゆく党組織を守ることに関心するだけのカルトにも等しいセクト主義は、その狭量な意図に反して、「緩慢な衰退」に自らを追い込むばかりだ。その無自覚さ、独善、傲りは、いずれ目に見えるリスクをもたらす。「その時は、そうするしかなかった」という日本人にありがちな状況依存的思考は、責任回避の自己保身としか受け取れず、不信感は拭えない。かつての不毛な内紛や内ゲバのような愚を2度と繰り返さないことを表明することは最低限必要であろう。なんとも随分と辛辣な言い方で先輩諸氏には申し訳ないが、これは非難ではない、一つの考察である。こうした旧い殻に閉じこもり淀んだ左翼の思考一行動様式や政治文化の旧弊(くだらない事)をパラダイムシフトしない限り、不信は払拭できない。左翼への信頼がここまで地に落ち、しらけた若者の左翼離れを見逃せなかったことに証明されている。それでは左翼再生の前途は厳しい。直視すべきは、なぜかとも左翼は不信を拭えず危機から脱することができないのかという事実だ。その負債は次世代に回され革命のバトンは手渡せない。

では「左翼の再生」に最も問われていることは何か。今日最も重要な課題は、「自由と平等を原理とした民主主義を実践すること」「民主主義社会を構成すること」(A・ネグリ)であり、「社会的な公正・平等に基づいた権利を取り返すための闘争」(D・ハーヴェイ)なのである。「民主主義を戦い取ること」(マルクス)は、プロレタリア革命一人間解放の「第一歩」である。未来を切り拓くモーメント(契機・拠り所)だ。

何年に一度の選挙・投票による代議制は、民主主義の回路の一つにすぎない。制度的回路であるこの議会政治の限界性を考慮せず、代議制が民主主義の全てであるかのように絶対化して、他方で非制度的回路一団体外からの草の根の直接行動、抗議、抵抗、蜂起など多種多様な「民主主義の実践」を排除することは、実は古いタイプの既成政治のパラダイムなのである。既成政党が代表する「制度的政治の劣化」、投票率の低下は、世界で深刻化している現象だ。代議制の活性化だけで「民主主義の危機」が乗り越えられないことは明白だ。草の根から直接民主主義の実践・行動と権利意識を高めることなしに、危機に瀕した民主

義をラディカルに再生することはできないであろう。労働運動をはじめ社会運動の裾野を広げ「連帯の砦」を築くための陣地戦が急務である。20世紀的な組織政党モデルから考えると、政党ではない、過渡的な政治運動体一連合体という21世紀型の新しい多面的な左翼勢力を構想することが問われているのではない。幾多の犠牲の上に「少しの進歩」でも後戻りさせず、「前進を促す潜在力」を育み直接民主主義を実践してきた沖縄や韓国民衆の闘いにこそ、私たちは学ぶ必要がある。

「人間らしく生きられる公正で平等な権利」のための社会運動一労働運動に陣地戦の焦点(フォーカス)を合わせることによって、「真の民主主義」(あるいはラディカルなプロレタリア民主主義)のヘゲモニーを握る草の根型の連合体(アソシエーション)を、21世紀におけるコミュニケーションやソヴィエト(評議会)として築くこと。これが「見えない鎖で繋がれたプロレタリア一塵げられた持たざる者の解放」を通じて、階級の無い、戦争も搾取も差別もない、誰もが虐げられない、すなわち資本制社会に代わるまったく別の新しい(オルタナティブな)社会の創造を使命とする私たちの21世紀の革命の構想一「希望の思想」と「解放の政治」と「連帯の組織」である。このビジョンのもと、私たちは、プロレタリアが手にした革命のトーチ(たいまつ)を次代に受け渡していく。それが私たちに課せられた重い使命・役割だ。資本主義グローバリズムと闘うための21世紀の新機軸は、台頭するナショナリズムに対抗して、草の根から真の民主主義を戦い取ることであり、それは世界に共通する反資本主義一制度変革のポリシーだ。プロレタリアの国境を越えた連帯で、ラディカルなデモクラシーと新しいインターナショナルを築き上げ世界を変えよう!

今ほど左翼の存在意義とその未来一再生か衰退かが問われている時はない。私たちは、左翼の再生のために、これまで不可能だと思われてきた「新たな試み」に挑む。新しい現実・新しい情勢に対応した新しい革命のビジョンと戦略(押し付けがましくない)提示が今こそ求められているからだ。新しいことは、前例のない異例なことだ。だが少数勢力であっても、その持ち味、異色性、独自性を発揮できれば、旧来の左翼の活動方法や形態、政治文化にパラダイムシフトを促し、かつての輝きを取り戻す転機になりうる。だからこそリスクを冒す価値があるのだ。

社会の変革は、常に草の根から、不公正・不平等への怒り、反乱の広がりから起きる。だが、それが1年後なのか、それとも自分が生きている間には起きないのかは分からない。だからこそかつてゲバラが革命への試練の途上で語ったように、「我々は次の世代のために革命の種を蒔いている。それがいつか実を結ぶであろうことに希望を持っている」のである。私たちは未来に「革命の種」を蒔

き続ける。蒔かれた種は、やがてプロレタリア民衆の闘いの沃野で芽を出し花を咲かせ実を結ぶであろう。それが私たちの希望だ。たとえ目指した理想に辿り着くことが我々の世代ではかなわなくとも、歩を進めてきた足跡は新しい道になる。その道を照らすために灯したトーチは、必ずや次世代に引き継がれていくに違いない。いま革命の変革を担う者に求められていることは、資本主義に対抗するラディカルなイニシアティブとアンチ・テーゼを打ち立てることであり、オルタナティブな(今までとはまったく別の新しい)政治勢力一反資本主義左翼を組織する陣地戦に全力を尽くすことである。「越せぬ壁はない。開けられぬ扉はない。崩せぬ壁はない」。「問い掛けながら前へ進め！」(サパティスタ)

プロレタリアの心臓は、赤く燃え立つ革命への情熱と連帯一つを支えに、闘いある限り、どこまでも共振し鼓動する。耳を澄ませば「資本主義に終わりを告げる最後の鐘」一革命の序曲(プレリュード)が世界中で鳴り響いている!

●結語

本論稿(Ⅰ～Ⅲ)の眼目は、第①に「未来を拓く新しい左翼」の旗をいかに立てるのか、という重要な課題に答え、小さくともその新たな一歩に資することにある。第②には既に10年前から開始された左翼再生への「新しい試み」を引き継ぎ、21世紀の革命のビジョン一理念と構想・戦略を提起することを通じて、次代に繋ぐためのステップアップを期したことであり、さらに第③に左翼を再生する「新しい道」に歩を進めることをいったん決めたら、それに全力を投入して「次のステージ」に向けた助走を始めるためである。

それは、我が同盟(蜂起社)にとって、これまで40年有余にわたり『蜂起一赤星(2001年改題)一Red Stars(2016年改題)』と継続してきた機関紙活動と政治党派としての在り方そのもののパラダイム・シフトに踏み出すことを意味する。左翼の存亡がかかる今、自らの存在意義を見つめ直し、左翼再生のイニシアティブを提示できなければ、我々は文字通り歴史的な使命を終えかねない。そういう強い危機感があるからだ。肝に銘じたいのは、左翼を再生する使命の重さだ。ステレオタイプの旧来型左翼からはどんなに煙たがられても一時退却もいとわず捨て身で「新しい道」を切り拓いていく。何故なら信頼も展望も失った今日の左翼を再生するためには、旧弊からの脱却が不可欠であるからだ。我々には悠長に構える余裕はもうない。新しい左翼の旗が立てられるかどうか、この数年がその行方を決するラスト・チャンスになる。

本論稿が、左翼の現状に危機感を抱き「左翼の再生」を渴望する全てのプロレタリア・活動家にとって、これまでとは違う新しいタイプ(オルタナティブな)反資本主義左翼の旗を立てるための議論に資することを望んでやまない。全ては解放と連帯のために!